

研究と安らぎの調和する場所

北大植物園

市民の安らぎの場として長い間親しまれている北大植物園。今回はその植物園のもう一つの顔にスポットを当ててみます

北大植物園は、正式には北海道大学北方生物園フイールド科学センター耕地圏ステーション植物園といえます。

一口に植物園といっても公園的なものや研究用のもの、遊園地に近いものなどさまざまです。北大植物園は、研究・教育・実習を主な目的としながら、広く自然教育に役立つようと、古くから市民に公開されてきました。

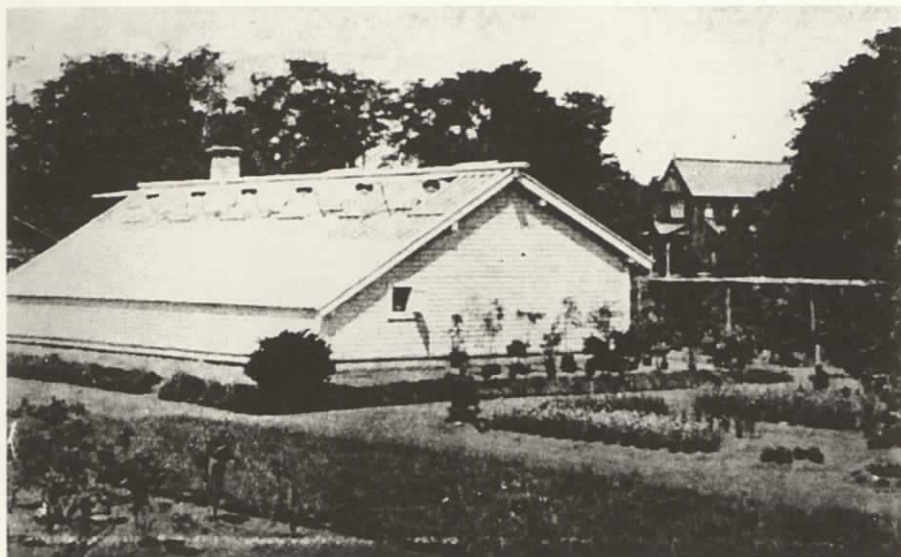
クラーク博士の申し出によって計画され、宮部金吾博士による設計と造園がなされたこの植物園。大正時代には園内の温室でメロンが実り、北海道初の試食会が開かれました。露地物と違って温室栽培のメロンは一株に二つしかならないという希少価値の高いもの。参加者たちはその甘味をじっくり味わっ

たそうです。また、この温室には、クラーク博士が植物学を勉強するきっかけになったというオオオオバスが展示されています。

植物園の重要な仕事の一つに「種子交換」があります。これは園内で採れる種子を、研究で必要としている世界中の植物園・大学・研究所との間で交換し合うもので、明治十二年（一八七九年）から始められました。

例えば植物園で展示しているライラックの仲間、フランス、オランダ、ルーマニア、ウクライナなどから種子が送られてきたものです。また、植物園の正門から北海道庁までの道路に植えられているアカナラは、二十五年（一八九二年）ごろ、北アメリカから送ってもらった種子を、植物園で育て、そこで育った親木から植栽されています。

このように、種子交換事業によって外国の種類を日本でも見ることができるようになります。園内ではさまざまな地域の植物が、四季を通じて私たちを楽しませてくれます。これらの植物には一つ一つ丁寧な説明が加えられています。実際に植物に触れるだけではなく、その植物に関する知識を深めて



明治時代の温室（札幌教育委員会文化資料室所蔵）

もらうことで、より緑に対する親しみを持つてもらおうと考えられているからです。市民が気軽に立ち寄れ、長く愛されている裏には、長い研究の歴史があるのです。

（平成十三年十月号・第七十九回）